ハナナガウンカ科

(翅長浮塵子科)

Derbidae

甚だ軟弱なウンカで一般に長い前翅を有し、同翅の臀部は網状脈を有していない。熱帯地方に多い類である。甘蔗の害蟲として次の2種が知られている。

138 アカハネナガウンカ

Diostrombus politus Uhler

成蟲 體は朱黄色、短大。前翅は頗る長く體長の約2倍の長さあり、透明稍々淡黄色を帯び、翅脈は暗褐色。後翅は前翅の約3分の1の長さを有し、末端尖り暗色。腹部の末端にある第1生殖節は両側に鎌状の突起を有し、雄に於ては細長く雌に於ては少しく短く幅廣し。體長4mm、開張17mm内外。

經過習性 本種は稀にしか発見されない種類で甘蔗の重大害蟲ではない。

加害植物 甘蔗、ススキ、チガヤ、其の他禾本科植物。

分布 台湾、沖縄、九州、本州。

139 ハネナガマダラウンカ

Phenice ~~moesta~~ moesta Westwood

異名：カスリハネナガウンカ

成蟲　體は黒色、頭部は淡黄色、複眼は暗褐色。前胸背は黒色でその正中線及兩側に各1條の淡黄條線がある。小楯板は大で黒色その背面に頗る顯著な3條の淡黄色の隆起線を有して居る。腹部の背面は黒色であるが正中線に龍骨狀に隆起し淡黄色を呈して居る。前翅は細長く黒褐色、その中に無色の斑紋を散布し霜白狀を呈し後翅は暗褐色、半透明で翅脈は黒色である。體長3mm. 開張13mm.内外。

經過習性　甘蔗の葉の裏に多數發見されることがあるが大害はない。

加害植物　甘蔗の他禾本科植物。

分布　台灣．南支那．比律賓．爪哇．印度．セイロン。

總、農、試、昆蟲係用紙　(19×24)

グンバイウンカ（軍配浮塵子科）

Tropiduchidae

頭部は多少前胸背より狭、頭楯側に隆起線を缺くか若しくは不明瞭な隆起線を有す。前胸背には3條の隆起線があつて基部に於て彎曲し陥凹するが稀に圓く弓状をなすものがある。接合板縁は真直か若しくは爪状部の後方に於て圓くなる。前縁部は往々擴がり、前縁膜には横脈を有す。後肢跗節の第1節は細長い。

143　グンバイウンカ

Tam[illegible]nia debilis Stal

異名：*[illegible]erepora (Epora) onukii* MATSUMURA

Ossa dimidiata SHIRAKI (nec MOTCHULSKY)

ミドリグンバイウンカ

ミドリヒラタウンカ

成蟲　淡緑色、頭及胸背は淡赤褐色、頭は圓く前方に突出し、長さは頭幅と同長。頭頂の周縁、中央の小字形の隆起線及前中両胸背の3條の隆起線は青緑色。前翅は半透明にして小顆粒を散布し、翅端の3分の1の所は網目状をなす。體長6mm内外（翅端まで）。

幼蟲　淡緑色、複眼は暗赤色、尾端には綿様の　毛数個を有し、扇子の骨の如く開閉する。

經過習性　幼蟲は主として葉の裏面、成蟲は主として葉の表面にあって養分を吸收して加害するが其の害は軽微である。

加害植物　茶、桑、柑橘、樟、茄子、蓖麻、珈琲、棉。

分布　台湾、内地、南支那、印度。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

No.

アヲバハゴロモ科　(羽衣科)

Flatidae

前翅の爪状部の先端は細小であるか或者にては広きものもあり、分離せる2脈を有し、顆粒状突起を散布する。爪状部の皺は明瞭、前縁膜には横脈を有し、内縁部には網状脈を欠く。後肢脛節末端には可動の刺を欠く。成虫も幼虫も共に屡々群棲性で、後者は長い縮曲せる絲状の白色蠟質物にて被はれてゐる事が普通で、何れも植物に吻を挿し込み養液を吸収する、為めに時に大害を與ふる事がある。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

137. アヲバハゴロモ

Geisha distinctissima Walker

異名：*Geisha sauteri* JAC.

成蟲　美麗なる淡緑色で白蠟を僅に分泌して粘附す、頭は黄緑色僅かに突出し正中央に短い隆起線がある、前胸背は極めて小さく中胸背は大で中央部は著しく前方に突出し、3條の縦隆起線がある。前胸背には2條、中胸背に4條の太き淡赤色の縦線がある、翅は甚だ大で外縁は殆ど直線をなし周縁は美しき淡赤色を呈する。顔の側隆起線、複眼、頭楯、口吻、胸部の下面、前中肢は淡赤色である。體長10mm内外（翅端まで）。

幼蟲（若蟲）　淡緑色で白色蠟質の綿絮で包まれ、尾端に2個の尾状の蠟質の綿絮を長く出し、肢はよく発達して跳躍に適す。

経過習性　年何回の世代か不明であるが數回の世代を累ねる様である。幼蟲は4～6月頃最も多く、幼梢部より若き葉の裏面に10數疋が群居して1面に綿絮を分泌し自體並に其の附近を被ひ養分を吸收し加害する、静岡縣にては茶園に相當の害を與へて居るが本島に於ては其の害は極めて軽微で

ある。

加害植物　茶、桑、月橘。

分布　台湾、日本内地。

駆除豫防法

1. 被害枝を害蟲と共に切取り踏み潰すこと。

2. 被害甚だしいときはデリス剤、除蟲菊剤等を撒布すること。

キジラミ（木虱科） Psyllidae (Chermidae).

木虱類は體形の蟬に類似した、小形の昆虫で、體長は普通約7mm.よりも遙に小さい。口は吻状を呈し、觸角は細長く普通10節より成り、跗節は2節より成つて居る。成虫は常に4枚の翅を有し、静止する時は之を脊上に屋斜状に置き、敏活に跳躍する。翅は透明或は半透明で、斑紋を有することがあり、脈は割合に少い。幼虫は5齢を經て成虫となり、蛹は無い。幼虫の體は扁平なること多く、白色の蠟質物を分泌するものがある。種々なる植物の主として若芽及若葉に群集寄生し、その液を吸收して植物を衰へしめ、又多量の液状糞を排泄する。此糞は植物に附着して、煤病を發生せしめ、植物の機能を害するのみならず、その外觀を損ずる。又葉及若枝を捲縮せしめ、或は虫癭を形成することも多い。

本島には現在30種餘りの種類が知られて居るが、その中果樹に加害する種は次に説明する2種である。

驅除豫防法　ニコチン石鹼液（1000倍）石油乳劑（20倍）或は除虫菊加用石油乳劑（30倍）を撒

布するを可とする。驅除に際しては、成虫は敏速に跳躍飛行するを以て、薬剤を撒布する以前に成虫の逃げ去らざる様注意するを要す。又ミカンノキジラミの如きは、柑橘のみならずゲッキツをも加害するを以て、ゲッキツに寄生せるものをも驅除するを要する。薬剤は1−2週間を隔てて、2回以上撒布すると一層有效である。

ミカンノキジラミ

Diaphorina citri Kuwayama.

成虫　體は褐色を呈し、中胸部の背面には黒褐色の縦線を有し、翅は半透明で多數の褐色の點斑を撒布す。體長約2-2.4mm。

經過習性　一箇年に7-8世代を重ね、周年蕃殖し、新芽及新葉に群集寄生し、之を捲縮させることがある。幼虫は黄色で　成虫は腹端を擧げて靜止するが、之に觸れる時は速に跳躍する。卵は若芽或は若葉の組織中に産下される。南部には殊に多く、大蕃殖をすることがある。

加害植物　柑橘、ゲッキツ。

分布　臺湾。フイリッピン、ジャバ、印度、マレー半島、支那。

驅除豫防法　ゲッキツにはミカンキジラミの他にも、柑橘と共通の害虫が少くない。従て柑橘園の内外にゲッキツを栽培することは、柑橘害虫の飼養所を供給することになるを以て、柑橘園には之を栽培しない方がよい。又柑橘害虫の驅除の際にはゲッキツに寄生する害虫をも同時に驅除するを可とする。薬劑撒布の他にゲッキツの被害枝を切り去るのも有效である。

マンゴウノキジラミ

Microceropsylla nigra Crawford.

成虫　黒色にして、光澤を有し、甚だ小形である。觸角は黄色を呈し、甚だ短く、先端には甚しく長い2本の毛がある。翅は透明で、幅が甚だ廣い。體長約1.5mm。

幼虫　甚だ扁平で、幅が甚だ廣く、淡黄色である。

經過習性　南部に普通で、一年數世代を重ね、マンゴウの新芽及新葉に群集加害し、大蕃殖を爲すことがある。マンゴウの新芽を出す頃に殊に多い。卵は葉の裏面の組織内に産下され、産卵の痕は後に褐色を呈するに至る。幼虫は葉裏に密着して靜止し、成虫は活潑に跳躍する。若葉は本種の加害により捲縮することがある。

加害植物　マンゴウ

分布　臺灣(南部)。印度。

136 タイワンクハキジラミ

Pauroceph ala psylloptera Crawford

成蟲 羽化當時は、淡黄色であるが、漸次黒斑を生じ、黄色と黒色との斑を呈する。腹部各節の背面基部は黒色を呈し、翅は透明である。體長約1.7mm。

幼蟲 白色乃至淡黄色を呈し、體の長さは幅よりも大い。

經過習性 桑の重要害蟲であって、主として若葉の裏面に群集し、之を縮ましめ、大発生をして大害を加へることがある。1年に約7～13世代を累ね、周年蕃殖し各時代のものが見られる。卵は若葉の脈の両側に産下され、1匹の雌は200粒以上も産卵し、数日にして孵化する。幼蟲は葉脈に沿ふて静止し、5回の脱皮をなし、13～20日餘りで成蟲となり、又多量の液状の糞を排泄する。此糞は固まって葉に附着することが多い。成蟲は跳躍し飛行する。

加害植物 桑。印度及南洋にてはイチヂク屬Ficusの植物に寄生すると云はれるが、本島にては未だイチヂク類では見られない。

分布 台湾、フイリッピン、ボルネオ、セレベス、印度等。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

駆除豫防法　本要覧第一編第67頁参照。

No.

コナジラミ科（粉虱科）*Aleyrodidae.*

微小な昆虫で、種々な植物、殊に樹木の葉の主として裏面に寄生する。成虫は普通7節より成る細長い觸角と、乳白色又は稀に黒色の脈の、少ない4枚の翅とを常に有し、跗節は著明なる2節より成り、静止する時は翅を屋斜状に背上に保つて居る。成虫は跳躍、飛行して分散し、甚だ發見され難く、野外にては目に觸れることが少いので、普通發見され易い幼虫によつて種類を區別する。幼虫は體は扁平にして、色淡く、稀に黒色を呈し、植物の葉に密着寄生し、眼は殆んど常に之を缺き、觸角と肢とは退化して短小となり、背上よりは見ることが出來ぬ。幼虫は四齡を經て蛹となり、蛹は最後の齡の幼虫皮の中に留り、卵は主に葉裏に産着けらるる。

粉虱類は葉にのみ寄生するので、冬季落葉する樹には冬は寄生することなく、常緑樹にて越冬する。然し本島にては殆んど全部の樹は冬季も葉を有するので、一年中此に寄生することが出來る。

此昆蟲は一般に發見され難く、又幼虫は

介殼虫に甚だ類似して之と見誤られて居るが、主要な害虫を含み、次の如き害を植物に加へる。

(1) 吻状の口で葉の液を吸收し、植物を衰へしむる。葉を變色せしめ或は枯死させることがあり、又稀に葉を捲縮せしめ或は虫癭を生ぜしめることがある。

(2) 多量の液状の糞を排泄し、此糞は植物の表面に附着して、煤病を發生させ、植物の機能を害し又植物の外觀を損ずる。此煤病菌の黒色の層はその樹に寄生する介殼虫を保護して蕃殖を助けることがある。

(3) 植物の病原體を傳播することがある。

本島には現在約75種の粉虱が知られて居るが、果樹に寄生するものはその中約13種で、柑橘に寄生するものは5種ある。此昆虫は一般に雑食性であるから、現在野生植物にのみ寄生するものとして知らるる種が、今後果樹にも寄生加害するに至ることが起り得るであらう。

驅除豫防法　凡ての種類に適用し得るから、その一般を記述する。

(1) 此等の昆虫は苗木等に附着して運搬され易いから、苗木の輸入、運搬、植付等

に際しては、無被害なるものを選擇すべく、被害木は青酸瓦斯にて燻蒸し、或は薬劑を撒布して驅除するを可とする。
(2) 被害木の葉には松脂合劑(約20-30倍)又は機械油乳劑(約25-30倍)或は石鹸水等を撒布すべきである。葉裏に寄生することが多いから薬劑は葉裏に充分撒布せねばならぬ。又一回の撒布後約2週間の後再び撒布する時は驅除が一層完全に行はれる。
(3) 薬劑は被害木の新芽を出す以前に撒布すべきである。
(4) 後述する如く、此昆虫は一般に雑食性であるから、果樹のみならず、果樹園内外の他の植物に寄生せるものをも同時に驅除しなければ驅除の目的は充分達し難い。
粉虱の加害する果樹には介殻虫の加害も多いから、此等の昆虫は同時に驅除する様に努むべきである。

ミカンノコナジラミ

Dialeurodes citri Ashmead.

成虫　體は淡黄色で白色粉状物にて被はれ、翅は白色不透明である。體長約0.96-1.2mm。

幼虫　幅廣き楕圓形にして、扁平、淡黄乃至白色を呈する。體長約1.5mm。

經過習性　一年中蕃殖し、常に各時代のものが見られ、一年に多數の世代を重ね、柑橘に普通で、殊に日當りの悪い處に多く、稀に大蕃殖をすることがある。

加害植物　柑橘の他に、次に示すが如き種々なる樹木にも寄生する。此等の樹木は總て常緑で滑なる葉を有する。モクタチバナ、クチナシ、カンコノキ、アカギ、タブノキ、フカノキ、ホザキサルノヲ、ショウベンノキ。

分布　全島。日本の本土、北アメリカ、南アメリカ、シヤム、印度、セイロン、支那、印度支那。

敵生物　本島には有益なる寄生菌の1種があつて、此粉虱を殺すことが多い。此菌に寄生されたるものは白色を呈し、形も大きくなり、甚だ發見され易い。

驅除豫防法　前述の通りであるが、藥劑

撒布の際は柑橘のみならず、他の加害植物に寄生せるものをも驅除するを要する。寄生菌に寄生されたるものの多い時は、特に驅除をする要はない。

柑橘に加害する粉虱の中重要なものは、本種と後述のミカントゲコナジラミとである。

フトモモノコナジラミ

Dialeurodes (Gigaleurodes) cinnamomi Takahashi.

幼虫　體は甚だ薄く、圖示せるが如き體形を呈し、淡黃にして、脊面中央に黃赤色の部分あり。體長約1.1mm。

加害植物　フトモモ、シナクスモドキ、クスの一種。甚だ重要なる害虫にあらず。

分布　臺北附近及嘉義に於て發見された。

No.

バンジロウノクロコナジラミ

Aleurotuberculatus guyavae Takahashi.

幼虫 黒色にして、 圖に示した様な形體を呈し、 體長約0.75mm。

加害植物 バンジロウ。

分布 臺北。

No.

バンジロウノシロコナジラミ

Aleurotuberculatus psidii Singh.

幼虫　白色にして、圖示せるが如き形狀を爲し、體長約0.75mm。

加害植物　バンジロウ、リウガン、フトモモ、センリヨウ、クス、ヤナギ、マルヤマカンコ。大害をしない。

分布　全島の平地に普通なり。印度。

ヤマモモマルコナジラミ

Aleurotrachelus caerulescens Singh.

幼虫 體は殆んど圓形にして、扁平、赤褐色にて、體長約 0.85mm。

加害植物 ヤマモモ、エノキ、クチナシ、ヤナギ、サルスベリ。ヤマモモに多し。

分布 全島。印度。

ヤニコナジラミ

Aleuroplatus pectiniferus Quaintance et Baker.

幼蟲 黒色にして、無色の粘質物で全く包まれ、圖に示した如き形を呈し、體長約0.9mm。

加害植物 フトモモ、クワ、カタン、タイワンツバキ、ヤナギ、タイワンハンノキ、ハマイヌビワ、等なれど特記すべき大害なし。

分布 全島の平地に産し、又印度に分布す。

ヤマモモコナジラミ

Bemisia myricae Kuwana

幼虫 精圓形にして、薄く、體の周圍に32本の等長の長毛を一列に有し、白色を呈し、體長約0.8mm。

加害植物 セイロンオリーブ、クワ、タブノキ、バンジロウ。

分布 臺北附近及屏東にて発見された。日本の本土にては桑の大害虫として知られ、本島に於ても桑に大蕃殖をすることがあるが、果樹には未だ大害を見ない。

No.

ヒメコナジラミ

Bemisia giffardi Kotinsky.

幼虫　體は細長い楕圓形を呈し、淡緑色乃至白色で、體背には一對の著明なる縦の隆起線がある。體長約1.1mm。

加害植物　柑橘。

分布　本島にては臺北州に發見されたるのみで、一部の柑橘園には普通である。日本の本土、ハワイ、印度、支那、印度支那に分布す。

ミカンノウスイロコナジラミ

Aleurolobus citri Takahashi.

幼虫　體は甚だ扁平にして、圖の如き形狀を呈し、白色、體長約1.3mm。

加害植物　柑橘に寄生し、甚だ稀なり。重要なる害虫に非ず。

分布　臺北附近に發見されたるのみである。

マーラットコナジラミ

Aleurolobus marlatti Quaintance

幼虫　楕圓形にして、前種よりは少しく太く、光澤ある黒色を呈し、明なる眼の痕を有す。體の周圍よりは白色の蠟質物を出し、體長約1.2mm.ある。體背には全く長毛と突起はない。

加害植物　柑橘。大害なし。

分布　従来臺北附近に於て發見されたのみであるが、全島に分布するものと思はれる。日本の本土、支那、印度支那、印度、セイロン、ジヤバ、フイリツピン等に分布す。

バンジロウノケナガコナジラミ

Aleurolobus setigerus Quaintance et Baker.

幼虫 黒色にして前種に甚だ類似して居るが、體背に多數の長細毛を有することによつて區別が出來る。體長約1.2mm。

加害植物 バンジロウ。大蕃殖をなすことがある。

分布 從來の調査にては臺北附近に發見されたに過ぎないが、南部にも産するものと思はれる。セイロン、支那に分布す。

No.

ミカンノトゲコナジラミ

Aleurocanthus spiniferus Quaintance.

従来本島の害蟲報告書にマーラツトコナジラミとして記述された種で、本島に於て最も重要な粉虱である。

成虫　殆んど橙黄色で、少しく白粉にて被はれ、翅は黒く、前翅には白色の斑がある。體長約1—1.3mm。

幼虫　楕圓形で、黒色を呈し、體の全周圍には著明なる白色の分泌物を有し、體背は隆起し、多數の先端の尖つた長い突起を有する。體長約0.73—1.13mm。

經過習性　幼虫は柑橘の葉裏に群集し、大蕃殖をすることが少くない。一年中蕃殖し多數の世代を重ねる。

加害植物　柑橘、バラ、ヤナギ、フウノキ、テリバザンセウ等。

分布　全島。日本の本土(九州、静岡)、沖繩、支那、印度支那、印度、フヰリツピン、ジヤバ、西印度。

敵虫　本島にては寄生蜂が居て本種を殺すことが少くない。九州にては支那より寄生蜂の一種を輸入して本害虫の驅除に努めて居る。

クチナシノトゲコナジラミ

Aleurocanthus spinosus Kuwana.

幼虫　體は黒褐色或は黄褐色で、楕圓形を呈し、體背には多數の先端の分枝せる突起を有し、體長約0.9mm。

加害植物　柑橘、クチナシ、フウトウカツラ、ノボタンの一種。柑橘には多からず。

分布　本島特有にして全島に産す。

柑橘加害粉虱検索表(幼虫)

(1) 體は全く黒色。……………………(2)
―體は白色、淡黄色、淡緑色、或は黄褐色等にて黒色ならず。……………(3)

(2) 體の背面には先端の尖れる多數の長い突起がある。…………………………………………ミカンノトゲコナジラミ
―體の背面には突起或は長毛全くなし。…………………………マーラットコナジラミ

(3) 體は細長く、背面に一對の著明な縦隆起あり。…………………ヒメコナジラミ
―體は楕圓形で、背面に著明なる一對の縦隆起なし。………………………(4)

(4) 體は黄褐色或は黒褐色を呈し、背面に先端の分叉せる多數の長突起を有する。…………………クチナシコナジラミ
―體は淡黄色或は白色を呈して薄く、背面には突起或は長毛がない。……(5)

(5) 體の背面は中央部と周邊部とに分たれる(圖を見よ)。…………………………………………ミカンノウスイロコナジラミ
―體の背面は上記の如く分たれず。……………………………………ミカンノコナジラミ

農業部農業試驗所 1895 AGRICULTURAL RESEARCH

123. ススキノナガコナジラミ（ススキノコナジラミ） *Aleurolobus barodensis* MASKELL は、印度にては、甘蔗の害蟲として知られるが、本島にてはススキに発見され、未だ甘蔗に加害することは知られない。

124. マツリカノコナジラミ *Aleurotuberculatus jasmini* TAKAHASHI は、マツリカ、モクタチバナ、ヅツキツ等に寄生するが、一般に甚少く、又（125）ブッソウゲノコナジラミ *Dialeurodes* (*Singhius*) *hibisci* KOTINSKY もマツリカに寄生することがあるが、共に甚少い。クチナシ類には数種が寄生するがその中、加害の大なるものは、（126）クチナシノトゲコナジノトゲコナジラミ *Aleurocanthus spinosus* KUWANA と（127）クチナシノコナジラミ *Aleyrodes* ~~kuu~~ *kuchinasii* SAKAKI とである。クチナシノトゲコナジラミは、葉裏に大蕃殖して、此を枯すことがある。本種に就ては既に第一編（65頁）に説明したから、参照され度い。クチナシノコナジラミの幼蟲は、白色、楕円形を呈し、扁平で、クチナシの葉裏に群集し白色の蠟質物を出して居る。此幼蟲の寄生せる部分は、葉は表面に向って円く少しく凸出し、簡単な蟲癭を形成する。又本種の排泄

物には、煤病が甚蕃殖するので、クチナシは黒色を呈する。クチナシ以外の植物には寄生しない。

AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

128. タイワンクワコナジラミ

Trialeurodes mori Takahashi

幼蟲　白色で、圖示せるが如き形態を有し、體背は周邊部に多数の小い圓形の凹を有し、體長約.75mmである。

經過習性　野生又栽培の桑の葉裏に寄生し、全島に普通である。大蕃殖、大害をなすことあり、明治45年6月頃、臺北州下の桑園は一大害を受けたことがある。年中蕃殖し、年数回の世代を重ねる。

加害植物　桑。稀に柳にも寄生する。

分布　全島に産し、本島以外にては未だ知られない。

驅除豫防法　コナジラミ類の驅除法に就ては既に、本要覽第一編(59頁)に記述したから參照されたい。本種に對しては、石鹸水が有効で、水約18リットルに對し、石鹸約4.5キログラムを加へた液を、强力ポンプにて、約7日を經て2回以上撒布するを可とする。

本島の桑には本種の他に、(129) ヤマモモコナジラミ *Bemisia myricae* KUWANA, (130) ヤニコナジラミ *Aleuroplatus pectiniferus* QUAINT. et BAKER, (131) イタビカヅラノコナジラミ

1895

Aleurotuberculatus ficicola TAKAHASHI,（132）バンジロウノコナジラミ *Aleurotuberculatus psidii* SINGH, 及び（133）タイワンコナジラミ *Dialeurodes* (*Dialeuropora*) *setigera* TAKAH. も寄生し、殊にヤマモモコナジラミは大蕃殖をすることがある。此種は日本の本土に於ては桑の大害蟲として知られてゐる。本要覧第一編（63頁）の説明を參照され度い。

驅除法はタイワンコナジラミに準じて可である。

134 ワタコナジラミ

Bemisia tabaci Gennadius

異名：*Bemisia gossypiperda* MISRA et LAMBA

Bemisia hibisci TAKAHASHI

幼蟲 白色で、圖示せる如き形態を呈し、體長約0.7mmである。體背には14本の透明なる太くして長い刺毛を有するものがあるが、本島に産するものの大部分は圖示せるが如く、體背に刺毛を缺いて居る。

經過習性 草棉の葉裏に群を成して寄生し、稀に大蕃殖が見られる。印度、アフリカ等に於ては、棉の大害蟲として知られ、そのモザイック病を傳播し、或地方では、その爲に棉栽培が不可能に陥つたと云はれて居り、本島に於ても今後注目すべき害蟲であらう。雜食性で、次に示すが如く種々なる植物にも寄生し、從つて棉の栽培及び本蟲の驅除に際しては、此等の植物にも注意を要する。

加害植物 草棉、ササゲ、大豆、クロタラリヤ、その他豆類、チヨマ、ブッソウゲ

分布 台湾、印度、馬来半島、アフリカ、ヨーロッパ、南洋諸島。

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895

135 カンシヨノコナジラミ

Neomaskellia bergii Signoret

　成蟲　雌の體長1.3mm，開張3.0mm内外で頭部及胸部は暗赤褐色、腹部は灰黄色、尾端は黒色である。前翅は黄白色でその上に無数の黒斑を有し、後翅は灰白色である。前後翅共縦走せる1脈を持って居るだけで其他に翅脈はない。跗節は明瞭な2節からなり、雄は雌よりも體が小さい。

　卵　淡黄色卵形で上端は細く下端は截断状を呈して居り、1本の短い柄によって葉面に附着して居る。卵の長徑0.23mm，短徑0.13mm、卵柄の長さ0.04mm内外。

　幼蟲　幅の廣い楕圓形で扁平、色は淡黄色（若）乃至黄褐色（老）で體長約0.3～1.3mm。

　經過習性　幼蟲は甘蔗の葉の裏面に群棲し、葉から汁液を吸收して生活して居るもので4齡の終りに蛹化する。蛹は最後の幼蟲の皮を被たまゝ蛹化し、成蟲は此の皮を破って羽化するものである。成蟲には雌雄の區別があるが交尾しないで單性生殖をなし、卵を産む。卵は雌の體を中心として周圍に指環状に産附され、一雌の産卵数は100～120粒、卵期間は6～7日、幼蟲及蛹の期

間は合せて20～25日である。本種は台湾全島に分布して居るが重要なものではない。
　分布　台湾、南支那、比律賓、印度、ジャワ、ニューギニヤ、フィージー等。
　天敵　本種の幼蟲には寄生蜂の1種 *Encarsia* sp. が寄生して居ることが多い。

農業部農業試驗所
TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE
1895